身近なまちの風景物語(30)

安全の並存

すくすくと伸びた太い幹。剪定され、さっぱりとした枝。あたかも部活に励む高校生のようだ。

その脇にはスッとしたポールが立つ。頂部からやさしい灯りでまわりを照らす。わが子を見守る母親のようにも思える。

街道の並木は江戸時代にもあったが、市街の街路樹の歴史は浅い。明治に入ってからである。道路の幅が広くないと植えられない。

花木や実のつく樹木、その地域で特色のある樹木もあるが、概して病害虫に強い樹種が選ばれる傾向にある。全国的には、イチョウ、サクラ、ケヤキ、ハナミズキ、トウカエデの高木がよく見かけるが、中木や低木も含めると樹種は多様である。

一般的に街路樹の役割は、①沿道景観の統一感、季節感、うるおいをもたらすなどの景観面、②日差しを和らげ、ヒートアイランド現象の緩和や地球温暖化防止などの環境面、③車と歩行者の分離やヘッドライトの防眩効果などの交通安全面、④火災の延焼防止や地震の家屋倒壊防止などの防災面が挙げられている。

樹木に発生する虫、樹木へ寄ってくる鳥、落ち葉など、沿道住民や通行者にとって時には厄介な存在かもしれないが、街路樹はこのように多くの役割を担っている。

一方、それまで車、歩行者ともにそれほど多くなかった街路樹のある道路が、その通行量の増加に伴い、街路灯の設置が求められることがあった。防犯効果を含め、交通安全上も必要だった。

そのまちでは、その効果を発揮させるため、街路樹の伐採による間引きが行われた。枝葉によって照明が遮られるからだった。

それに対して市民から疑問の声が生まれた。見慣れた街路樹の伐採が問題視された。その後、街路灯の設置計画が見直されることになった。

できるだけ既存の街路樹を伐採しないことを前提とした街路灯の高さ、位置、照度などが現地調査を踏まえて再検討された。街路樹と街路灯によって、昼夜を問わず安全性は向上した。

野中 勝利
筑波大学芸術系教授・芸術専門学群長

挿絵：久田琳佳子（筑波大学大学院博士前期課程１年）